

ソマリア飢餓の原因

2011/11/24

国際協力NGOセンター(JANIC) 山口誠史

アフリカの角を中心とした東アフリカでは、現在 1300 万人の人々が飢餓に直面している。2011 年 7 月に出された国連の緊急アピールは、その深刻さを初めて世界中の人々に意識させた。しかし、飢餓は地震や台風のように、突然起きるものではない。既に 2010 年 9 月の時点で、国連は大規模な飢餓の発生の可能性について警告を発していた。その後、本来雨が降るはずの 12 月から 2 月にかけての雨季にほとんど雨が降らず、それが 60 年来の大干ばつとなって、この地に住む人々の生存を脅かすこととなった。



旱魃、すなわち雨が降らないことは、すぐに飢餓を生むわけではない。今回の大規模な飢餓は、いくつかの構造的な要因が重なって起きている。

基本は、雨が降らないことによる農作物への影響である。農作物が収穫できないと、農民は自分たちの食料を得ることができず、また農作物を打って得たお金によって買えたはずの生活用品も買えなくなる。牧畜を営む人々に対しても、旱魃は家畜の死という形で生活を脅かす。このように農作物が収穫できなくなったり家畜が死ぬ一方で、人々がそれを欲するため、地域における食料価格が高騰して、ますます食料の入手が困難になる。

2011年の飢餓の直接的原因

1. 旱魃(雨が降らない)
 - ・ 農作物が枯れてしまう
 - ・ 家畜が死ぬ
2. 世界的な食料価格の高騰
 - ・ 原油高、投機マネー
3. 劣悪な治安状況
 - ・ 武装勢力による人道援助の妨害

飢餓の発生

飢餓の深刻化

それに加えて、近年の世界的な食料価格の高騰が追い討ちを掛けた。リーマンショック以来の世界不況によって株や債権などから引き上げて行き場を失った多額の投機マネーが、食料やエネルギーの先物市場に流れ込んで、実需によらない価格上昇を招いている。また、経済成長によって豊かさを手に入れた新興国では、海外からの食料輸入が増え、そのことも世界的な食料価格の高騰に拍車を掛けた。

旱魃による農作物の収量減少と、それに追い討ちを掛けた世界的な食料価格の高騰は、東アフリカ

全体に影響を及ぼした。その中でも、ソマリアは極端に深刻である。多くの人々が国境を越えて、隣国のケニアやエチオピアに逃れた。国境地帯に設けられた難民キャンプにたどり着いた人々は、極度の栄養失調に陥り、悲惨な状況にある。ソマリア以外の国では、大勢の人々が隣国に流れ込むという減少は起きていない。なぜ、ソマリアの人々は住みなれた自分たちの土地を捨て、国境を越えなくてはならなかったのか。

それは、現在ソマリアが無政府状態で、武装勢力同士による戦闘が頻発しており、一部の武装勢力が人道援助すら妨害するからである。それによって、支援が必要な人々に物資を届けることができない状況が続いている。

なぜソマリアは、人道援助すら成り立たないような国になってしまったのか。東アフリカの中でも最も深刻なソマリアの飢餓の背景にある、歴史的・政治的な原因を探ってみる。

アフリカ北東部のアラビア半島に対して突き出した地域を、「アフリカの角」と呼ぶ。この地域の海岸沿いに位置するのがソマリアである。

ソマリアの飢餓の原因を考えるためには、4つのキーワードがある。

第1が「列強によるアフリカ分割の影響」、第2が「遊牧の民」、第3が「氏族社会」、第4が「地政学的な位置」である。

19世紀にアフリカ大陸は、欧米列強によって分断され植民地化された。その過程で、元々その地に住んでいた人々の文化や民族と関係なく国境線が引かれた。地図でソマリアとエチオピア、ケニアとの国境を見ていただきたい。多くの場所で国境線が直線であることがわかる。実際にその場所に行ってみると、何も無い大地が広がっているだけだ。その大地を、ソマリア人は家畜を追って、自由気ままに行き交っている。20世紀に入ってアフリカ諸国が独立を果たすと、列強によって引かれた国境線が紛争の種となる。そのひとつに、ソマリアが掲げた大ソマリア主義がある。ソマリア人が住む地域全てをソマリアの名のものと統合しようとして、エチオピア領オガデン地方の併合を唱えて武力衝突したのがオガデン紛争であった。

第2のキーワードは「遊牧」である。

世界中で遊牧が主要産業である国は、ソマリアとモンゴルだけだ。ソマリア人は、水と草を求めて、半砂漠地域(ブッシュ)をラクダやヤギ、羊などの家畜を連れて移動しながら生活をしている。彼らには定住地は無く、周囲の草や水が無くなれば、アッカルと呼ばれる簡易な組み立て式住居をたんでラクダの背に乗せ、次の水場を求めて移動する。彼らにとって、地図上に引かれた砂漠地帯の国境線など意味は無く、また国家に対する帰属意識も薄く、ブッシュを自由に行き来している。

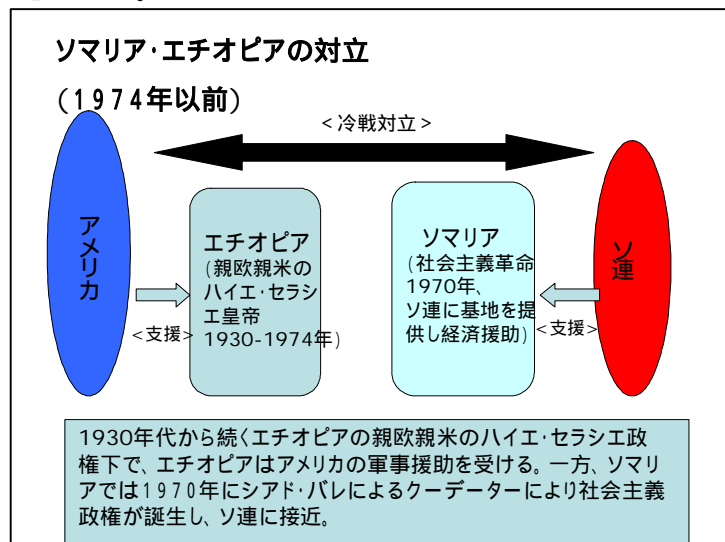
ラクダに家財道具を乗せて移動



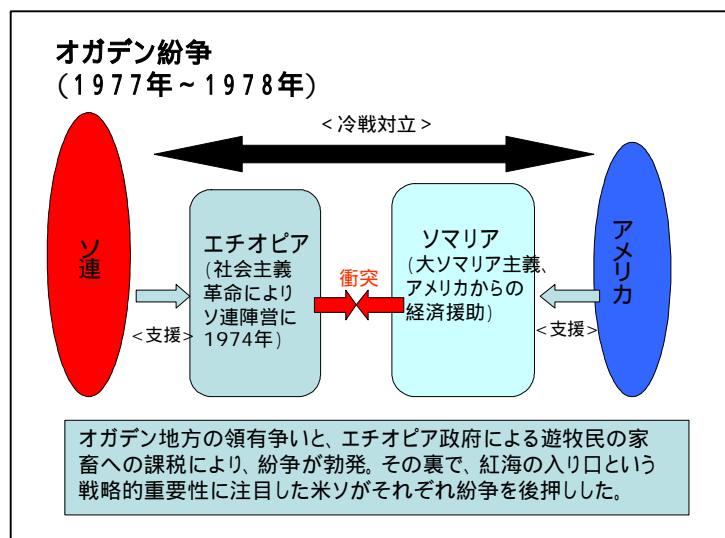
3 番目のキーワードは、「氏族社会」である。氏族社会とは、父系制を基礎とした血縁集団であり、相互扶助組織のことだ。ブッシュの中で遊牧をするソマリア人にとって、いっしょに移動し家畜を守っている仲間は互いに助け合う存在であり、その一方で家畜を奪いに来たり水場の取り合いをする他の氏族は敵である。定住地も住所も持たないソマリア人にとって、重要なものが名前だ。例えば、モハメッド・アブディ・ハッサンという人がいたとする。最初のモハメッドは自分の名前で、次のアブディは父親の名前、次のハッサンはおじいさんの名前である。その後ろにはさらに、アブドラヒ・イスマイル・アリー・モハメッド・・・と連綿と父系の先祖の名前が続いていく。彼らは、そのような名前を 30 くらい遡ってすらすらと言うことができる。ブッシュの中で出会った者同士が、互いの名前を言い合う中で、片方の 15 代前ともう一方の 16 代前から先が同じであれば、同じ氏族に属していることが確認できる。住所を持たない彼らにとって、名前こそがアイデンティティそのものなのである。このように、名前でつながった氏族社会では、同じ氏族で助け合う反面、他の氏族とは対立し争いの単位となる。

4 番目のキーワードは、「地政学的な位置」である。

ソマリアを含むアフリカの角は、東はインド洋、北はアデン湾に面しているが、そのアデン湾は紅海からスエズ運河を通してヨーロッパとアジアを結ぶ重要な航路上にある。1945 年から 1989 年まで続いた冷戦時代、その地政学的な位置によって、ソ連とアメリカがソマリアを交互に自陣営に取り込み、その見返りに莫大な援助を行った。ソマリアは、1969 年の軍事クーデターとその後の社会主義政権樹立以降、援助を受ける見返りに、アデン湾にらみを利かせるベルベラ港をソ連に軍事基地として提供した。



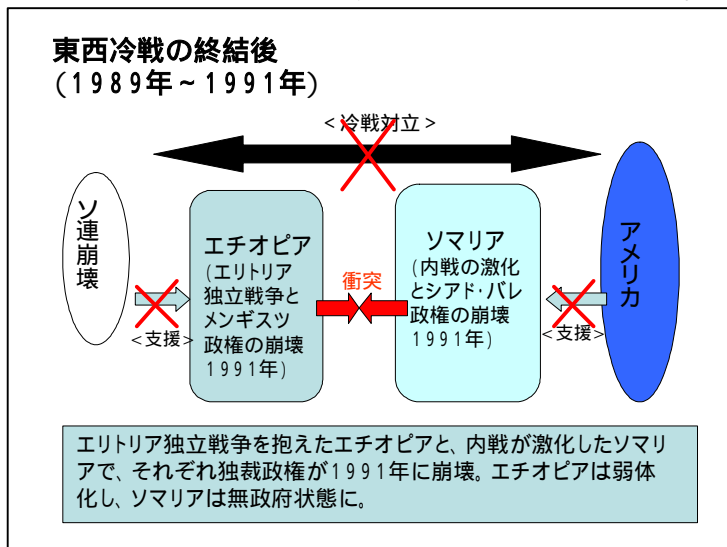
ところが、隣国のエチオピアで親欧米のハイレ・セラシエ皇帝が廃位させられ、1977年に社会主義のメンギスツ政権が樹立されたことによって、ソ連の援助がエチオピアに流れた。それに対抗する形で、ソマリアのシアドバレ政権はソ連と断交して米国に接近し、ベルベラ港についても米国に軍事基地として供与した。1979年にイラン革命が起きて、親米のパレヴィ政権が倒れると、イラン、サウジアラビア、ケニアというイスラエルを守るための米国の中東政策の要の一角が崩れたため、新たな軍事拠点としてソマリアが重要性を増した。そのため、アメリカは莫大な軍事援助をシアドバ



レ政権に供与し、その援助の一部は大統領と所属する氏族であるダロッドに流れ、権力基盤を強固にした。

ところが、1989年のベルリンの壁の崩壊によって冷戦が終結すると、この構図が大きく崩れる。

戦略的重要拠点であったソマリアのベルベラ港は、冷戦の終結によって重要性が無くなり、資源を持たないソマリアに対するアメリカの関心は急速の低下していった。アメリカからの援助が無くなったシアドバレ政権は、あっけなく1991年に崩壊。時を同じくして、ソ連の崩壊のよって後ろ盾を失ったエチオピアのメンギスツ政権も、30年以上続いたエリトリア独立戦争に敗れて同じく1991年に崩壊した。

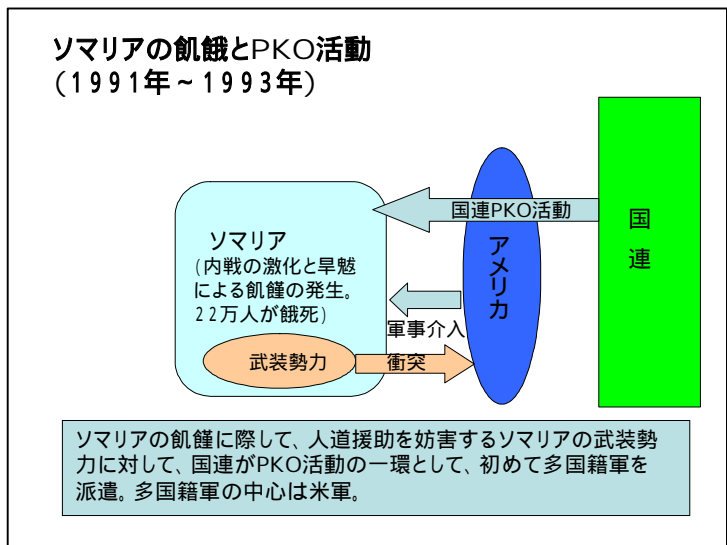


東西冷戦構造の中で、アメリカとソ連

から都合よく援助を引き出して独裁政権を維持していたソマリアは、冷戦終結とともにその地政学的な価値が失われて政権が崩壊し、後にはどんぐりの背比べのような氏族間の武力闘争とそれを支える多量の武器だけが残った。

とはいえ、再生の機会はあった。政権崩壊の混乱の中で、1991年早魃をきっかけに深刻な飢饉が発生した。10万人が飢えが原因で亡くなったと言われているが、この事態に国連は、食糧援助と共に武装勢力から人道援助を守るという名目で初めての

「多国籍軍」を派遣した。しかし、武装勢力が多国籍軍をも攻撃の対象とした結果、多国籍軍対ソマリア人武装勢力の戦闘となり、モガデシュでの武装ヘリコプターブラックホーク撃墜と米軍兵士の死体引き回しの映像が世界に流れたことをきっかけに、1993年米軍が撤退。その後1995年には全ての多国籍軍がソマリアから撤退し、その以降ソマリアは無政府状態が継続している。



石油などの重要な資源を持たないソマリアは、アメリカを始めとした欧米諸国から見るとなんら魅力を感じるところが無く、それゆえに打ち捨てられたと言えるだろう。

近年になって、再びソマリアが注目されるようになったのは、アデン湾及びインド洋北部を航行するタンカーや貨物船に対する「海賊」行為である。冷戦下のような軍事的な重要性はないが、ヨーロッパとアジアの交易ルートであり、紅海の石油のアジアへの通過地点であるこの地域の経済的な重

要性は低下していない。内戦で仕事を失い、武器だけは豊富に出回っているソマリアの現状で、漁民が武器を取ってタンカーや貨物船を襲い、身代金を要求している。ソマリアにまともな中央政府があり、政府が海賊対策に取り組めば効果はあるだろうが、各国政府がソマリアの無政府状態を放置していたために、そのつけがこのようなところにまわってきたと考えられる。

現在の飢餓民の悲惨な状況を改善し、合わせて海賊対策にも資するためには何が必要であろうか。飢餓民救援の短期的な対策として、現在はソマリア国内が危険なために、隣国に出てきた難民への支援が中心となっている。しかし肝心なことは、ソマリア国内にいる飢餓民への支援である。そのために、国連や欧米の大規模 NGO は、実施計画やガイドラインを作ってそれを国内のソマリア人を雇って遠隔操作で事業を実施している。時々、ソマリア国内に外国人が入ってモニタリングをしたり、逆にソマリア人のリーダーを隣国に招いて打ち合わせをするなどして、事業が適切に運営されているかチェックしているが、不正や非効率は免れない。

究極的には、武装勢力同士が諸外国の仲介によって和解し、統一政権を樹立して、各国からの支援を受けて武器を回収し（武器と農具や家畜との交換など）、また帰還兵士の社会復帰を促す職業訓練や働く場の提供といったプロセスを作っていくこと必要である。安定的な中央政府ができれば、海賊対策も行うことができるだろう。

しかし、このような全紛争当事者の和解は、過去に何回も失敗しており、簡単ではない。

その一方で、北部のソマリランドと北東部のプントランドは、国際的には未承認であるが、治安も安定しており政府機能も回復している。ソマリア全土を掌握する統一政府が無理であれば、国際社会は未承認のこれら自治政府に対して、支援を含めた関係作りをすることが必要であろう。

肝心の南部であるが、ユニセフ・ソマリア保健衛生部長の國井氏によると、ほとんどの地域で治安状況は悪いが、それでも村や町レベルで自らの地域を復興しようと取り組んでいる人々や、ソマリア人主体の信頼できそうな NGO などが少しずつ現れてきているとのことである。中央政府といった上からの和平や再建だけを考えるのではなく、これらの小さな芽が少しずつ大きくなって横につながり、地方政府ができてきて、それがやがて一つの安定した国に育っていくことが現実的な解決策かもしれない。

国家というシステムを作るのではなく、ブッシュを自由に家畜たちと共に行き来することができる、そのような安全を保障する仕組みさえできれば、ソマリア人たちは幸福なのではないか。

ソマリア近代史

年	出来事(太字はソマリア)
19世紀	欧米列強によるアフリカ分割
1869	スエズ運河完成
1886	イギリスが北部をソマリランドとして領有。南部はイタリアの保護領 植民地。
1945	第2次世界大戦終結
1960	アフリカの年(アフリカ各国が相次いで植民地から独立) ソマリア独立
1963	ソ連が軍事援助開始
1969	シアド・バレによる軍事クーデター。翌70年に社会主義政権樹立
1974	エチオピア革命(ハイレ・セラシエ皇帝廃位)。社会主義政権樹立
1977	オガデン紛争勃発 エチオピアでメンギスツ政権発足
1982	ソマリア内戦勃発
1989	ベルリンの壁崩壊。冷戦終結。
1991	シアド・バレ追放。内戦激化。飢餓発生。北部ソマリランドが分離・独立宣言。
1992	国連がソマリアに多国籍軍を派遣
1993	モガデシュ戦闘。アメリカ軍撤退
1995	国連 PKO 部隊完全撤退。以後無政府状態
1998	北東部のプントランド独立宣言
2001	米国同時多発テロ
2006	イスラム法廷会議がモガデシュ占領
2010	国連がソマリア南部の飢餓発生を警告
2011	国連が飢饉を宣言